

日常の文字言語表現の諸相

小助川 貞 次

富山大学人文学部紀要第72号抜刷

2020年2月

日常の文字言語表現の諸相

小助川 貞 次

1. はじめに

稿者が専門とする研究テーマは、漢字文化圏（中国を中心とする漢字漢文文化が広くかつ深く行き渡った地域、すなわち中国（台湾）、韓国（北朝鮮）、日本、ベトナム）において「漢文文献がどのように読解されてきたのか」という問題を、7世紀から20世紀までに書写・刊行された漢文文献に実際に書き込まれた当時の加点内容から具体的に解明しようとするものである。このような研究の目的と方法上、その過程で現代語に言及することはほとんど無い。しかし、実際の加点はすべての漢文本文に均質かつ規則的に現れるわけではなく、一つの文献の中でも加点密度の濃淡や加点の誤りがあるのが普通である。また加点が必要だと思われる難解な漢字・漢語に加点がなかったり、逆に加点の必要がないような平易な漢字・漢語に丁寧な加点があつたりすることも多い。さらに書込・加点の色彩（用具）は墨、朱、白、角筆¹⁾と多彩である上に、漢文本文の書写者・刊行者と読者・加点者が異なる場合には、これらの関係は一層複雑になる。このような加点について「そもそも論」を言えば、漢字には本義（その漢字本来の意義）と転義（本義から派生した類推できる意義、あるいは本義とはまったく無関係の意義）があり、読者・加点者が注目するのはむしろ転義の方であり（本義で使われている本文は簡単に理解できるからである）、転義で使われている本文には伝統的な古注釈が対応していることが多い。したがって加点内容には本義・転義を読み分けながら理解しようとした読者・加点者の学問的な営みが隠されていて、訓点研究ではそこまで目を向けなければならない難しさがある²⁾。

訓点研究におけるこのような観察方法と思考回路は、我々の身の回りにある日常的な文字言語表現（看板、ポスター、書類等）の背景に隠されているであろう実相をどのように読み取るのかということにも応用できるのではないのかと考えるのである。無論、実相を探ろうとする視点はひとり訓点研究に限らず、むしろ他分野の研究においてこそ得意とすることかもしれないが、文字言語表現の観察と分析は、少なくとも稿者の感覚では訓点研究が最も得意とする領域であると思うのである。稿者は日常的な言語情報が国語教育の教材として有効に活用できるのではないかという視点を前稿「日常言語情報を利用する国語教育の可能性について」（富山大学人文学部紀要第68号、2018年）で示したが、本稿では日常の文字言語表現の諸相（実相）について、公共施設、大学内、行政文書、店舗における事例を取り上げて論じてみたい。

2. 公共施設

事例1：駐車場注意看板

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所（以下「国立国語研究所」）の北側駐車場進入路に面した建物角（横断歩道の手前）に図1の看板「車が来ます／ご注意ください。」（／は改行，以下同じ）が立っている。



図1 国立国語研究所駐車場侵入路の看板（立川市緑町，2019.4.28 稿者撮影）

進入路の視界が建物によって遮られているので、歩行者に駐車場から出て来る車両に注意せよという内容である。句点は文の終わりを示すものであり、読点の使用に個人差が現れるのに比べ、句点は我々が日常業務で作成する文書やメール（SNSを除く）、学術的著作物、あるいは個人的な書簡などでも普通に用いられ、個人差は出ない。国立国語研究所の看板が目されるのは、二文から構成される一文目「車が来ます」の末尾に句点がないこと、一方で二文目「ご注意ください」の末尾には文字間を縮めてまで丁寧に句点が付されていることである。看板は限られた面積に必要なことを表記しなければならないので、一般の文書における句読法やくざり符号の使い方とは当然異なってくる。一文目末尾に句点がないのは文末で改行されているからで、この内容をそのまま細長い看板に一行で書くとすると「車が来ますご注意ください。」ではなく、「車が来ます。ご注意ください。」もしくは「車が来ます　ご注意ください」となるはずである。看板作成費用が電報のように文字数単位で決まるのであれば後者が選ばれるであろうし、よりシンプルに「車に注意！」ならもっと安価になる。逆にこの看板で一文目末尾にも句点を付すと「車が来ます。／ご注意ください。」となり、看板下辺に句点が二つ並ぶ間の抜けたレイアウトになってしまう。むしろ句点を省いた「車が来ます／ご注意ください」の方が見映えがよい。この看板の作成指示が国立国語研究所から業者にどのように伝わったのかは不明であるが、国

語を専門的に研究する機関において、このような看板が設置されていることは興味深い。

なお、このような注意喚起の標識においては、説明的な文よりもシンプルな標語レベル（例えば「飛び出し注意」「落石注意」のような）、あるいはピクトグラムのような視覚記号の方が伝わりやすいような気もするが、案外そうでないのかもしれない。記号を見て反射的に理解するよりも、文を読んで一旦頭の中で理解する過程を通した方がより注意力が増すようにも思える。この点に関しては今後の検証が必要である。

ちなみに句読点の問題は、このような現代の看板に限らず、古代の漢文文献においても興味深い用法がある。漢籍（中国古典籍）の古写本・古刊本では本文の要所要所に伝統的な注釈が割注形式で夾み込まれているが、この割注の直前にある本文にはたとえ文末・句末であっても句読点が加点されることは少ない。割注の存在が句切りの機能を果たしているからである。また、文末用法のある助字（也・矣・之）の直後でも句点は省かれることが多い。文末句末に機械的に句読点が加点されているわけではなく、漢文本文が置かれる環境によって句読点の加点がコントロールされていると考えることができる。国立国語研究所の看板において、一文目末尾で改行されていて句点がないということが、このような漢文文献における句読点の延長線上にあると短絡的に考えることはできないが、原理としては同じである。

事例2：サービスエリアトイレの注意書き

観光地や行楽地、高速道路サービスエリアでのトイレは、女性にとっては深刻な問題である。女性用トイレの方が男性用に比べて圧倒的に混み合うからである。図2は北陸自動車道・名立谷浜SA（下り線）の男性用トイレ入口付近に設置されている看板で、「ここは男性用トイレです／女性のご使用はお控え下さい」と書かれている。



図2 北陸自動車道名立谷浜SA（下り線）の男性用トイレ看板（2019.3.22 稿者撮影）



図3 北陸自動車道名立谷浜SA（下り線）の女性用トイレ前（2019.3.22 稿者撮影）

この看板からはさまざま問題を読み取ることができる。まず日本語の問題として、句点がないこと（後方に見える別の看板には句点がある）、接頭辞「ご（御）」「お」が重複して使われていること、「使用」なのか「利用」なのか（後方に見える別の看板では「利用」）、「控える」は禁止なのか自発的な遠慮なのか、「トイレ」なのか「化粧室」なのか（航空機や新幹線では「化粧室」が定着）など、たった二文なのに研究テーマは豊富にある。次に内容の問題として、このような禁止（遠慮）事項に類する表示があるということは、現実には男性用トイレを使用する女性が少なからずいるということを意味している（後方に見える看板も同様に「順番を守らない」利用者がいること意味している）。さらに「男性用」「女性用」という従来の二分割は近年の性的多様性に対応できていないのではないかという問題もある。また「女性用トイレ」にはこの看板と逆の看板（「ここは女性用トイレです／男性のご使用はお控え下さい」）があるのか（稿者は確認していない）、そもそも生理的な排泄欲求を「男性」「女性」で分別することが必要なのかという問題など、極めて多様でデリケートな問題がある。

それぞれの問題について、稿者はきちんと説明できる解答を持ち合わせていないが、この看板は「男性」利用者からの苦情を反映したものであることは容易に想像できる。たとえ小用であっても、その空間に「女性」が立ち入ることに強い羞恥心や不快感を覚える「男性」がいるのであろう。そのような「男性」社会を「女性」はどのように感じているのか。図3は図2の直後に撮影した写真である。「女性用トイレ」前に並んで図2の看板を注視している被写体からは「男性」社会に対する冷やかな声が聞こえてきそうである。稿者がこのトイレの管理責任者であれば、以下のような看板を男性用トイレ入口に設置したはずである。

混雑しているときは女性も利用します
混雑解消と譲り合いにご理解ください
(男性は女性用トイレを使用できません)

3. 大学内

事例3：おもしろい大学

富山大学五福キャンパスの正門を入ってすぐ右手に黒田講堂があるが、その手前の歩道上に図4の看板（以下、ポスター）が設置されている。ポスターは正門の方角、すなわち入構者の目に入りやすいように斜めに向けて置かれている。これは2019年4月に就任した齋藤滋富山大学新学長の所信表明「魅力溢れるおもしろい大学をつくります」³⁾を具現化したもので、カラフルで幾何学的な背景の上に白地で「おもしろい／大学」と書かれている。このポスターは「富山大学概要2019」「富山大学案内2020」の表紙にも使われている。大学は「おもしろい」のか

ということについては、新学長の強い意気込みは感じられるが、一方で近年の学外からの様々な「圧力」⁴⁾に曝される我々には素直に「おもしろい」と感じることはできない⁵⁾。



図4 おもしろい大学（富山市五福，2019.6.17 稿者撮影）

このポスターが「おもしろい」のは新学長が発するメッセージではなく、「おもしろい」に続く「大学」の「大」字のデザインである。「大」の2画目起筆部分がヒトの頭部を表すかのように●になっていて、その●の左右に電波を発信するような弧が描かれ、さらに●の上には雷のような折れ線が二本突き出ている。政府が提唱する新たな社会「Society 5.0」⁶⁾に対応する新しい学問の創出を目指そうとする新学長の意気込みを巧みに表現したものと理解される。

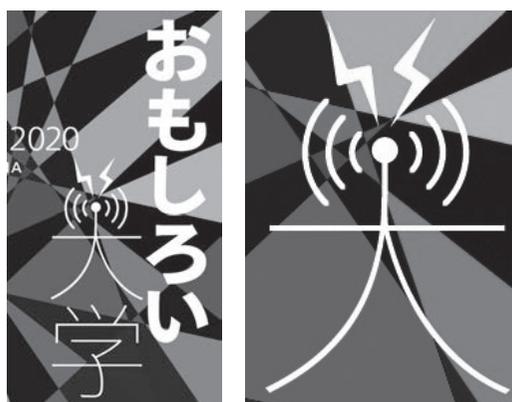


図5 おもしろい／大学（富山大学案内 2020 表紙の拡大）

ところが、このデザインされた漢字「大」は「笑」とも読み取ることができる。●の上に突き出た二本の雷のような折れ線が「たけかんむり」のように見えるからである。「笑」は現代

の漢字字体では「たけかんむり」の下に「夭」を置くが、古い時代には「犬」となっているものが多い。例えば、中国後漢・許慎(58-148)の『説文解字』を注解した清・段玉裁(1735-1815)の『説文解字注』によれば、唐代までは「笑」に作り、唐・唐玄度の『九經字樣』（開成2(837)成）に至って「笑」が現れたとされる⁷⁾。実際に、現存する唐代の開成石經（開成2年(837)刻）や敦煌漢文文献では、この「笑」が確認できる。



図6 開成石經(九經字樣)に見える「笑」
(京大人文研所蔵石刻拓本資料に拠る)



図7 唐代敦煌文献(S.10毛詩)に見える「笑」
(8世紀中期頃書写, IDP 画像に拠る)

このポスターの作制者が、このような漢字字体史まで理解して「大」字に「笑」字を重ね合わせてデザインしたとするならば、その学識の深さは驚嘆に値する。しかしもしそうだとするならば、このポスターの「大学」(笑学)からは、作成者や齋藤新学長の意図とは全く無関係に、「笑」に含まれるもう一方の意味「嘲笑(あざわらう)」⁸⁾に誤解される(曲解される)危惧を感じてしまう。そうでなくても近年おもしろくないことが多い我々にとっては、「おもしろい大学」は皮肉に聞こえてしまって仕方がない。図7に掲げた敦煌文献S.10毛詩の「顧我則笑」に続く注釈(割注)には「笑侮(之也)…是无敬心之甚也」とある⁹⁾。

このポスターが発信するメッセージの重みと責任は、ファストフードや飲食店、小売店の呼び込みキャッチコピーとはまったく異なっていると感じ取るべきである。そうでなければ、世間から「笑」われるのは我々大学自身である。

事例4：休館日のお知らせ

図8は富山大学中央図書館玄関に張り出された「休館日のお知らせ」である。これは「学内における省エネルギーの一層の推進及び教職員の心身のリフレッシュを図るため」の一斉休業(8月13日(火)～8月19日(月))が実施されたことに伴う措置で(通知の全文は富山大学HP「おしらせ」8月8日に掲載されている)、加えて夏休み期間中は土日休館なので10連休になるという「お知らせ」である。このような長期休館は富山大学に限ったことではなく、全国の省庁や大学等でも実施されている(年末年始も同様の長期休館になる)。



図8 富山大学中央図書館玄関貼紙（富山市五福，2019.8.9 稿者撮影）

高等教育・研究機関の心臓部とも言える図書館の長期休館は、稿者のような人文科学の研究者にとっては研究休止を意味するだけではなく、夏休みに集中的に勉強しようとする大学生や夏休みの課題を図書館で仕上げようとする市民（小中高生やその親）にとっても重大な障害になる。この貼紙には休館の理由は記されず、いわば図書館（図書館を管理する大学）の一方的都合を表明したものである。利用者に対するお詫びの気持ちは貼紙下方に小さく「ご迷惑をお掛けいたしますが、ご理解のほど宜しくお願い申し上げます。」と記されているが、この時期、商店街や観光地は書入れ時で（もちろん金融機関も休まず営業している）、そのノリで来館した利用者にはとっては「迷惑」な話だし「理解」してもらえないかもしれない。もっと危惧されるのは、日本国内の高等教育・研究機関がのんびりと長期休業している間も世界の研究は瞬時も停まることなく活動していることである。例えば悪いが、気象観測衛星やミサイル防衛システムに夏季休暇が無いのと同じである。普段あまり図書館を利用されない研究者は、学内の研究室やネットワークは普段通り利用できるので図書館の休館は問題無いと思うかもしれない。しかし「一斉休業」の理由の一つが「省エネルギーの一層の推進」である以上、これは研究室・実験室も含めて電気（エアコン、照明、電子機器、実験装置）を使うなというに等しい内容であることを理解すべきである。富山大学の理念「国際水準の教育及び研究」（全文は富山大学HP「大学紹介」で閲覧できる）とこの長期休館（一斉休業）とは相容れない内容であると思う。

もっとも、図書館職員にとって長期休暇はありがたいことには間違い無いので、「休」などと利用者を突き放した表現は止めて、蔵書を主体にして以下のようにすれば、きっと利用者も研究者も気持ちよく理解してくれるのではないだろうか。

わたしたち本にもどうかお休みをください
休み明けには元気になってお会いします！

4. 行政文書

事例5：シェイクアウト

日常の生活で「シェイク」と聞けば、年齢を問わず、まずはあの「マックシェイク」を思い浮かべるだろう。それほどまでに「シェイク」は言葉としての市民権を得ていると言える。試みにWeb検索（Google 2019年9月22日9:45）をかけると、「シェイク」の単独検索では「【みんなが作ってる】シェークのレシピ【クックパッド】」「シェイク（曖昧さ回避）-Wikipedia」「マックシェイクストロベリー (S)」が挙がる（検索時期・時間によって内容と順番が異なる）。Wikipediaの「曖昧さ回避」に「カクテルの製法的一种」に続いて2番目に「マックシェイク」が挙がっていること自体、この言葉が市民に慣れ親しまれていることを示している。

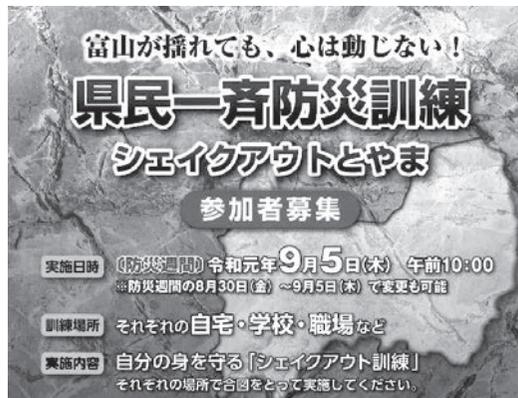


図9 県民一斉防災訓練チラシ（富山県防災・危機管理課）

図9は富山県が県民に呼びかけて実施した「県民一斉防災訓練／シェイクアウトとやま」のチラシの一部である（Web上で閲覧できる）。「県民一斉防災訓練～シェイクアウトとやま～Q&A」によれば、「シェイクアウト（ShakeOut）とは「(地震の)揺れに備えろ！」という安全確保行動の標語、かけ声をイメージして、アメリカの地震研究チームが研究成果を広く知らせる防災訓練のために考えた造語です（ShakeをOutするといった英単語の組み合わせではなくShakeOutでひとつの単語です。」とある（Q&A1）。また、従来の防災訓練との違いは、「いつでも・どこでも・誰でも訓練に参加できる」点にあるという（Q&A2）。「防災訓練」という仰々しい名称ではなく「シェイクアウト」というアメリカ発信の造語をそのままカタカナ英語として使用したところに従来との差異化が図られていると言える。

ところがこのチラシにはもうひとつ重要なキーワード「アウト」が使われている。「シェイク」と組合せて「シェイクアウト」となると、我々にはもはや「マックシェイク」の「テイクアウト

ト（持ち帰り）」しか思い浮かばない。これは「ShakeOut」が2008年から登場した新しい言葉であるのに対して、日本語にはすでに「アウト」を下部要素とするカタカナ英語が多数定着し、中でも「テイクアウト」は1980年代から使われているからである¹⁰⁾。「テイクアウト（テークアウト）」と「シェイクアウト（シェークアウト）」がいつ頃からどのくらい使われているのかを朝日新聞データベース「聞蔵Ⅱ」を用いて1985年以降5年刻み（2010年以降は1年刻みの別表を附す）で比較したのが表1である。

表1 朝日新聞に見るテイクアウト（テークアウト）とシェイクアウト（シェークアウト）

5年刻み 1985～2019	テーク アウト	テイク アウト	シェーク アウト	シェイク アウト	1年刻み 2011～2019	テーク アウト	テイク アウト	シェーク アウト	シェイク アウト
19850101～19891231	3	0	0	0	2010	30	3	0	0
19900101～19941231	7	8	0	0	2011	19	0	1	0
19950101～19991231	22	14	0	0	2012	20	5	0	13
20000101～20041231	115	17	0	0	2013	23	3	0	28
20050101～20091231	141	15	0	0	2014	21	5	0	32
20100101～20141231	113	16	1	73	2015	1	40	1	32
20150101～20190924	1	205	2	127	2016	0	40	0	38
					2017	0	40	0	25
					2018	0	43	0	16
					2019	0	42	1	16

「テイクアウト（take out）」がいつ頃から日本国内で使われ始めたのかは、新聞データベースだけからでは分からないが、2014年頃までは「テークアウト」が使われ、2015年を境に「テイクアウト」に変化しているのは、この年の9月に一般財団法人テクニカルコミュニケーター協会が発行した『外来語（カタナカ）表記ガイドライン第3版』の内容を反映しているのかもしれない。一方、「ShakeOut」は出現当初（2012年）からほぼ「シェイクアウト」が定着している。日本語の中に登場する時期を濃厚に反映しているといえる。

これに対して「マックシェイク」は、1971年7月20日に開店した国内第1号店（東京銀座三越1階）で、「ハンバーガー」「チーズバーガー」「フィレオフィッシュ」「ビッグマック」「マックフライポテト」「アップルパイ」とともに「マックシェイク」として販売されている¹¹⁾。日本語の中に登場した当初から「シェーク」ではなく一貫して「シェイク」であり、「シェークアウト」との違いがある。「シェークアウト」は朝日新聞データベースでは2011年10月22日朝刊（全国紙6頁）「米国各地やカナダで20日、大地震を想定した防災訓練「シェークアウト」があった。」が初出で、以後2015年6月17日朝刊（新潟全県版31頁）、2019年9月3日朝刊（大分全県版23頁）以外使われていない。

この運動の提唱元が「日本シェイクアウト提唱会議」という名称であっても、各自治体では、図9の富山県のチラシにあるように「県民一斉防災訓練」を主題に「シェイクアウトとやま」

を副題とするか、あるいは説明のどこかに「防災訓練」という従来からの言葉を入れなければならない理由が、日本語の中における新外来語の定着の問題だけではなく、実は「マックシェイク」との混乱を回避する目的もあったとしたならば、「シェイクアウト」運動は「マックシェイク」と混乱することで、却って短期間で日本語の中に定着できるかもしれない。

なお、「SHAKE OUT」(シェイクアウト)は1960年代にアメリカ合衆国アイダホ州キンバリーで創業したレストランの店名として実在する(1186 Kimberly Rd, Twin Falls, ID 83301)。Web上では2016年までのページが残っているが、現在は閉店しているようである¹²⁾。SHAKE OUTを利用してこの街の住人、あるいは旅行者にとって、ShakeOutはどのような響きを持つ言葉であるのか、興味の持たれるところである。

5. 店舗

事例6：そば

「そば(蕎麦)」屋の看板や暖簾の「そば」が、現行の平仮名字体「そば」ではなく「楚者」の崩しを使って表記されることはよく知られている(図10)。一方で変体仮名を使わずに現行の平仮名字体で看板を掲げる店もある(図11)。この「そば(楚者)」の表記には、変体仮名を使用しなくなった現代人が読めるか読めないかという識字能力の問題だけではなく、以下のような難しい問題がある。



図10 そば処青山

(富山市総曲輪, 2019.9.27 稿者撮影)



図11 立山そば

(JR富山駅南口構内, 2019.9.2 稿者撮影)

第一に、変体仮名とはいうものの、我々が目にする看板や暖簾の「そば」は、書体(漢字から派生した文字の形において存在する社会共通の様式。多くはその文字資料の目的により決まる)、字体(書体内において存在する一々の文字の社会共通の基準)、字形(書体内において認

識する一々の文字の書写（印字）された形そのもの¹³⁾、
 字母（仮名のもとになった漢字）のいずれの概念で理解
 すればよいのかという問題。例えば、楷書体で「楚者」
 と書いた場合、これは漢字なのか仮名なのか。逆に現行
 仮名の字母「曾波」を現在の仮名字体とは異なる崩し方、
 例えば図12のように関戸本古今集に見える「曾」や秋
 萩帖に見える「波」の形を残すような字で書いた場合、「そ
 ば（楚者）」とどう異なるのか。さらにこのような変体
 仮名表記は、縦書きの世界で「連綿」（上下連続して書写）
 を伴って発展してきたものなのに、「そば（楚者）」が表
 記される看板や暖簾の書字方向は横書き右（左）進行であって、古典籍における縦書きの変体
 仮名表記とは全く異なっている。図10のような「そば（楚者）」は、読める／読めないといっ
 た文字表記ではなく、ピクトグラムとの境界線にあるのかもしれない。



図12 変体仮名「そば（曾波）」
 （笠間書院『字典かな（改訂版）』
 1998年に拠る組み合わせ）

第二に、このような看板や暖簾の文字表記を研究材料とする場合、これは正式な店名なのか、
 それとも単なるデザインなのかという問題。店名といっても、店舗外の看板／暖簾／店内表示
 ／お品書き（店内の壁／テーブル上のメニュー表）／箸袋など、様々なものがあって、すべ
 てが同じように表記されているわけではないであろう。また、電話帳（N T Tのタウンページ）
 やWeb上ではどのように表記されているのか。町内案内板ではどうするのか。さらに登記上
 はどうなっているのかなど（変体仮名を使って登記できるのか）、一つの店舗でも集めなけれ
 ばならない文字情報は限りなく多く、かつ全てを収集整理する必要がある。

第三に、変体仮名で表示する店とそうでない店は何が違うのかという問題。この問題を解決
 するには、一軒一軒、実際に見て食し、店主に看板表記の由来をインタビューする必要がある
 のだが、何軒の「そば（蕎麦）」屋があるのかを把握すること自体、そんなに簡単なことではない。
 例えば、N T Tのタウンページ（富山県富山市版、2019年4月）では、「そば」は「うどん」
 と統合されて「うどん・そば店」の項目になっている（記載数は80店舗。「うどん・そば店（ス
 タンド）」は別項目として1店舗記載される）。しかもその中には和食のメニューのひとつとし
 て「そば」を出しているファミリーレストランや、ラーメン屋と思われる店も含まれている。
 さらに図11の「立山そば」は、「うどん・そば店」（129頁）の項目にはなく、「すし店（持ち帰り）」
 （132頁）に記載されている。店の由来（この場合には「源（みなもと）」という「ますのすし」）
 を知らなければ分からない。Web検索をしても同様のことは起こりうる。

以上の問題を踏まえて初めて、「楚者」という表記はいつごろ発生し、どのように定着していっ
 たのか、またなぜ字母「楚者」が選択されたのかという問題に迫ることができると思うのであ
 る。なお、菓子店舗などでも看板に変体仮名を使っている例があるが、それは店名（名字・屋

号)の方であって「そば(蕎麦)」のような店舗の分類としての共通性を持つものではない。

まとめ

以上、本稿では公共施設、大学内、行政文書、店舗における文字言語表現を取り上げて、稿者がこれまでに行ってきた訓点研究における観察方法と思考回路を応用して、その諸相(実相)がどのように読み取れるのかということ論じた。世の訓点研究者や言語景観の研究者からは、本稿の内容はそれらとは似て非なるものであるという誹りを免れないかもしれないが、訓点という特殊な古代言語を専攻するものとして、現代の実相と関係を持とうとすれば、このような方法しかないのかもしれない。ただし、実相を読み取ろうとするには、「ある」「ない」という事象をどう認識するのか。例えば禁止や自発的な遠慮の世界にはまったく逆の世界が厳然と存在することを認識することが必要であるし、表現されることの背景には表現されないこと／表現する必要のないことが存在することを認識する必要もある。さらに我々は表記されたモノをどう認識し、どのような反応を起こすのかということになると脳科学の世界に入り込み、実験的な検証も必要となってくる。

本稿はひとつの試みの段階であるので、十分に調査したり論じ尽くせたりしていない部分が多く、さらにこのような関心の持ち様はすべての研究者に共通するものではなく、稿者の実社会に対する懐疑的な見方が背景にあることも承知している。このテーマが稿者にとって3号雑誌にならないように今後の展開に努めたい。

注

- 1) 象牙や竹製の用具の尖端を以て紙の紙面を直接傷つけ凹ませることによって表記された訓点。角点とも呼ばれる。
- 2) このような加点の背後にある「古注釈をどう利用したかという問題」については、松本光隆「漢書楊雄伝天暦二年点における訓読の方法」(『国語学』128, 1982年 → 『平安鎌倉時代漢文訓読語史料論』, 汲古書院, 2007年), 小助川貞次「上野本漢書楊雄伝訓点の性格—中国側注釈書との関係—」(『訓点語と訓点資料』77, 1987年), 同「上野本漢書楊雄伝の声点について」(『国語国文研究』86, 1990年), 同「上野本漢書楊雄伝天暦二年点における典拠の問題について」(『訓点語と訓点資料』記念特輯, 1998年), 同「上野本漢書楊雄伝天暦二年点における切韻と玉篇の引用について」(『築島裕博士傘寿記念国語学論集』, 汲古書院, 2005年), 石塚晴通「上野本漢書楊雄伝の訓注と朱点—古辞書及び現行漢和辞典の記述に及ぶ—」(『訓点語と訓点資料』88, 1992年)に詳しい。また訓点資料が置かれている環境に注目して「階層構造」という観点から論じたものとして小助川貞次「階層構造から見た唐鈔本漢書楊雄伝の研究課題」(『訓点語と訓点資料』141, 2018年)が参考になる。
- 3) 富山大学学長メッセージ, 富山大学平成31年度入学式式辞, 富山大学概要2019・富山大学案内2020に掲載されていて、いずれも富山大学HPで閲覧できる。
- 4) たとえば平成27年6月8日の「下村通達」(27文科高第269号「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて(通知)」)にある「特に教員養成系学部・大学院, 人文社会科学系学部・大学院に

- については、18歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割等を踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう努めることとする。」や、経団連「今後の採用と大学教育に関する提案（2018.12.04）」など。
- 5) 富山大学教養教育院FD2019では「学生と考えるおもしろい授業」（2019年9月25日）が行われ、第三部では「富大の授業をおもしろくするために」が組まれた。さらに2019年10月1日付で発表された「大学運営に係る学長ビジョン「Saito Vision 2019」」（富山大学HP「お知らせ（2019年10月1日）」で閲覧できる）でも「魅力溢れる／おもしろい／大学」がスローガンとして使われている。
- 6) 「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society）」（内閣府HPによる）。注3も参照。
- 7) 「徐鼎臣説孫愐唐韵引説文云。笑喜也。从竹从犬。而不述其義。攷孫愐唐韵序云。仍篆隸石經勒存正體。幸不譏煩。蓋唐韵每字皆勒説文篆體。此字之从竹犬。孫親見其然。是以唐人無不从犬作者。干祿字書云。咲通笑正。五經文字力尊説文者也。亦作笑喜也。从竹下犬。玉篇竹部亦作笑。廣韵因唐韵之舊亦作笑。此本無可疑者。自唐因度九經字樣始先笑後笑。（中略）宋以後經籍無笑字矣。（以下略）」（民国69年（1980）、漢京文化事業有限公司、四部善本新刊本に拠る。句読は稿者）。『九經字樣』の開成石經（開成2年（837）刻）は、京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料「文字拓本」から「笑」を検索し、表示された一覧の左右にある漢字一覧から「笑笑」を選択し、表示された画像をクリックすれば全体像が表示される。ただし、全体像の表示には事前に「DjVu ブラウザプラグイン」（無料）をダウンロードしておく必要がある。なお、宋代以降の文献でも大広益会玉篇（澤存堂本・中37a、中華書局、1987年）、類編（汲古閣影宋鈔本・五上16b、上海古籍出版社、1987年）では「笑」が見出語に見える（同じ宋代の文献でも大宋重修廣韻や集韻では「笑」は見えない）。また日本国内で13世紀から14世紀にかけて書写された論語写本では「笑」に作るテキスト（清原教隆写定本系統の正和本や嘉暦本等）と「咲」に作るテキスト（高山寺本清原本、中原師秀書写文永本）があり、宋版系テキストに基づいた写本では「笑」に、日本伝来の古い系統のテキストでは「咲」に作るようである（巻第7憲問14章「夫子不言不笑不取乎」。漢字字体史の観点から見ると興味深い例となる）。
- 8) 国立国語研究所編『分類語彙表（増補改訂版）』（2004年）によれば「笑う」は「心」と「待遇」に分類され、「心」の方は表情・態度としての「笑う」の意味が並ぶが、「待遇」の方には脅迫・中傷・愚弄の意味が並ぶ。『広辞苑（第7版）』（岩波書店、2018年）、『新明解国語辞典（第7版）』（三省堂、2017年）を始めとする一般の国語辞典でも同様。
- 9) S.10の割注原文は以下の通り。「興也終日風爲終風暴疾也笑侮（之也箋云既竟日風矣而又暴）疾興者論州吁之爲不善如終日風之不休止其（間又有甚惡其）在莊姜之傍視莊姜則反笑之是无敬心之甚也」（（ ）内は原本欠損。通行本により補う）。
- 10) 国立国語研究所編『分類語彙表（増補改訂版）』（2004年）には、シャットアウト、スイングアウト、スリーアウト、ダッグアウト、タッチアウト、チェックアウト、ツーアウト、テイクアウト、テクニカルノックアウト、ドロップアウト、ノックアウト、フェードアウト、フォースアウト、プリントアウト、レイアウト、ロックアウトの16語が収録される。朝日新聞データベース「聞蔵Ⅱ」（1985～）によれば、「テークアウト」は1985年3月11日夕刊12頁「科学万博の外国館レストラン、人件費など高騰で本格店断念目立つ」の記事にある「マニラヌードルズなどのテークアウト食品だけのフィリピン館」が早く、「テイクアウト」は1990年4月26日夕刊13頁「主婦だって休みたい テイクアウト店 GW特集」が早い。なお「テイクアウト」はKOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（国立国語研究所）によれば、窪田陽一編著『都市再生のパラダイム』（PARCO出版局、1988年）に「ここには、エスニック料理等の各種レストラン、テイクアウト・ショップ、デリカテッセン、グルメ向け高級専門食料品店等が、ぎっしりと詰め込まれ」があり、より早い例となる。
- 11) 日本マクドナルドホールディングス株式会社・企業情報「沿革・歴史」に拠る（<http://www.mcd-holdings.co.jp/company/history/>）。

- 12) The Shake Out (<https://theshakeout.biz/about-us/>)。閉店（閉業）の情報は Google Map の表示に基づく。Google のストリートビューで確認できる。
- 13) 石塚晴通「階層構造としての仮名字体」（第 114 回訓点語学会研究発表会（2016 年 5 月 22 日，京都大学）における発表資料）に基づき，一部表記を改めた。なお漢字における字体概念とデータベースについては，石塚晴通「漢字字体史研究一序に代えて一」（石塚晴通編『漢字字体史研究』，勉誠出版，2012 年）に詳しい。